親戚家族

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親戚家族

【Ｎコード】
Ｎ０２４８ＢＡ

【作者名】
Ｅｎ

【あらすじ】
許しと
玩具と
怪獣の話

「どういう風の吹き回しだろ？」
大晦日のカウントダウンの後、公平は彼女に、元日に実家に戻るのを許された。
「嫌われたんじゃないの？」
妹の小夜子がからかう。
彼女もXの家に冬休みの間はずっと泊まる事になっていたのだ。
「そんな馬鹿な。俺たちは昨日は始めてキスしたんだぞ」
「というかさ。二人ともまだキスしてなかったの？クリスマスの時にでもやったら良かったのに」
「付き合ったのがその少し前で…それに昨日あいつ『最初は何となく楽しそうだったから付き合った』とか言ってたし…」
「…あの子ならあり得るわー…」

「冬休みはお正月にも帰って来れないくらい忙しいんじゃなかったっけ？」
公平の母は、彼に嫌み混じりに言った。
それでも、どこか嬉しそうである。
「色々あって…」
「前に帰ってきた日も同じ台詞を聞いたわ。小夜子も許可無しに公平の家に泊まりに行って…」
小夜子は家にはそう伝えていた。
「許可とったじゃん！」
「そういうのは事前にやらないとなの！」
「…ごめんなさい。色々あって」
実際に色々あった。

だがそんな事情は母は知らないし、言っても信じてもらえるか怪しい。
「あんたまでそんな事言って！」
「まあもういいじゃないか…」
「お父さんは黙ってて下さい！」
「はい…」
（あぁ。やっぱり俺はこの人の子供なんだ）
公平はしみじみと感じた。
彼は普段から彼女の尻に敷かれている。

「それで？あんたはいつまでこっちにいるの？」
母は公平に尋ねる。
「ごめん。よく分からない。けど暫くはこっちにいられるかも。」
彼の彼女は帰ってくる日の指定はしなかった。
後で電話でもするつもりなのかもしれない。
「あんた本当に忙しかったの？」
「…色々あるんだ」

「…何か忘れてる気がする」
公平は家族と居間でＴＶを見てる時に呟いた。
「何だ？彼女ができた報告か？」
父が公平をからかう。
「あぁそれもあったか…」
「あんた、彼女できたの！？」
「…まぁね」
「ちょっと…ちゃんと報告しなさいよ。したら、今日連れてきても

良かったのに」
「…無理じゃないかな」
小夜子が呟いた。
「あんたも知ってんなら言いなさい」
「公平。彼女は優しい子か？」
父は恐妻家だ。
だから、公平には気をつけるように何度も言ってきた。
「…どうだろ」
「お前な、あれだけ気をつけろと警告したのに…」
「どういう意味かしら？」
「…何でもないです」
「…まぁいいわ。もうすぐ、おばさんたちが来るから、その時に彼女の事を話してね？」
「え…」
「嫌なの！？」
母は意外そうに言う。
「…嫌…じゃないけど」
「不細工なのか？」
父は失礼な事を聞く。
「そんな事は無いよ。ただ…ちょっとね…」
「はっきりしなさいよ。…もう、春が来たら聞かせなさい！」
春とは、母の妹、つまり公平のおばの事で季節ではない。
つまり、彼女の事を話すのは先送りできない、という事だ。

「明けましておめでとうー！」
とうとう春の家族が来た。
「明けましておめでとう。光くんも久しぶり！」
母は春とその子供の光に言った。

「あけましておめでとうございます」
光は子供らしい声で答える。
手には、玩具を握っている。
「おねえちゃん。あけましておめでとうございます！」
彼は小夜子にも挨拶した。
恐らく公平にはしない。
光は公平の事を露骨に嫌っているのだ。
「公平。そろそろ話しなさい」
「え？何を？」
「この子彼女ができたみたいなんだけど話したがらなくて」
「公平くん彼女できたの！？」
「えい！」オーケイ！ジュピルー！
光は公平に持ってきた玩具で攻撃してきた。
痛くは無いが鬱陶しい。
「光。ちょっと静かに。公平くん？本当なの！？」
「はあ…まあ…」
「えー！どんな子！？」
「美人だけど恐い子みたい」
「あぁ…姉さんみたいな…」
「ちょっと…それ、どういう…」
「それで？」
春は無視している。
「えっと…ん？」
公平はここで自分が忘れていたこと。
恐らく、小夜子も忘れているだろうことを思い出した。
「…まさか」
「どうしたの？」
「逃げる気？」
「違う…。ヤバい…」
「「は？」」

母と春の声が重なる。
「お兄ちゃん？…あ！」
ようやく小夜子も気づいたらしい。
「この！この！」デ！デ！デ！デン！リミッブレイ！
光はまだ公平を攻撃している。
「みんな！すぐに逃げるぞ！あいつが来る！」
公平の家は彼女にバレているのだ。
それを忘れていたのだ。
「お前二股でもしてたのか？」
父が聞いてきた。
「そんな事出来るわけ無い！」
「二股してても私たちが逃げる必要なんか…」
「そういうことじゃないんです！」
小夜子が春に向かって叫ぶ。
「死ね！二股怪人！」オーケイ！
「二股なんかしてねぇ！いや、だから、そうじゃなくて…」ズシン！
「」「」

「今の音何？」
「あれは…」「公平ー？遊びに来たよー！」
彼女の大きな声がする。
「あら…彼女さん来たの？元気な人みたいね。ちょっと挨拶してこようか」
「じゃあ俺も…」
「私も…」
「ぼくも！」
「止めろ！外に出るな！あいつに会うな！」「聞こえてるよー？」
「」

「随分耳が良いな。しかし、やっぱり恐い子みたいだな」「お父さんですかー？聞こえてますよー？」「ハハッ。普段から色々馴れてるから…ウワァァァ！」
「お義兄さん？どうしたんですか…キャァァ！」
「春？どうし…キャァァ！」
「おばさん？どうしたの…うわぁぁぁ！」
「あーあ…」「ふふっ。よろしく」
「お兄ちゃんどうする？」「ちょっと止め」デ！デ！デ！デン！
「…取り敢えず出よう」「僕は怪獣じゃな」リミッブレイ！
公平の彼女はちょっと背が高いのだ。
常人の数十倍程。

公平の彼女は家の中に入れない程に巨大なのだ。
だから、公平たちは外にいるし、彼女は彼らの前で正座しているし、光は彼女の脚を殴っている。
「X…さん？」
父が尋ねる。
Xとは公平の彼女の名前だ。
「皆さん。明けましておめでとうございます。…えっと…お母さんは…」
「あ。私」
母は既に状況に適応してきたようだ。
この辺は公平と似ている。
「え…」
「？どうしたの？」
「いや…お姉さんかと思って…あんまり綺麗だったから」
「あら。ありがとう。ちなみにこっちは私の妹ね」
「」

春は気絶していた。
「ちょっと…びっくりさせ過ぎたかな…」「この！怪獣め！」
リミッブレイ！
「うぅ。だから僕は怪獣じゃないんだって…」
「…」
公平が何か言いたげにXを見た。
「どうしたの？」
「いや…子供には手を出さないんだなって」
「なっ…！」
一瞬Xは怒った顔を見せたが、すぐに笑顔に変わる。
「へぇ…そういう事言うんだ…」
そしてXは公平に手を伸ばす。
彼は身構えたが無駄だった。
なすすべなく捕らえられる。
「そう言えばお父さんも面白い事言ってましたねー」
Xは公平の父にも手を伸ばした。
「ひぃ！」
「ちょっと…Xちゃん？」
「何ですか？」
「それは私の物よ。そういう事は私がやるから」
「ふふっ…そうですね。じゃあ後はお母さんに任せます」
「…お前ら気が合うな」
「僕だって、公平がYに苛められたらいい気はしないからね」
「苛められるのは確定か…何であのガキにもやらないんだ…」
「そういうこと言うなよ」
「あいつは俺に挨拶もしないし、『死ね！』とか言ってくるんだぞ！」
「子供のやる事じゃないか…」「死ね！怪獣死ね！」リミッブレイ！
「…大きくなったら覚えてろよ…」
「実際怪獣じゃ…グエ！」

Xが公平を強く握る。
「僕は怪獣じゃない！」
（怪獣じゃないか…）
公平が、薄れゆく意識の中最後に思ったことだった。

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0248ba/

親戚家族

2011年12月31日16時52分発行